

畑のイノシシ被害 深刻

夏の猛暑の影響で餌となるドングリが不作になってきているためか、例年になくイノシシによる農作物被害が増えている。そんな中、京都府の山奥で耕作放棄地の再生に取り組み農業生産法人が、猟期外であっても、わなによるイノシシ捕獲を認めるよう問題提起した。有害鳥獣駆除の担い手であるハンター（猟師）も減少している。農家に自衛手段は許されないのだろうか。

（山川剛史）



捕獲されたイノシシ＝京都府福知山市のみわ・ダッシュ村で

猟期外の農家 乏しい自衛策

「やられた!」。ジャガイモなどの収穫を間近に控えた十月末、京都府福知山市の農業生産法人「みわ・ダッシュ村」に衝撃が走った。

触れると感電する電気柵を設置していたが、畑は無残に掘り返されていた。足跡や掘り具合からみて「犯人」はイノシシ。十畝に作付けした落花生の半分、三十畝のジャガイモの四分の一が荒らされた。

これらの作物は全国の「一口農場主」（会員）に配るため、無農薬で丹精込めて育ててきた作物だ。残った分は何としても守りたい。電気柵を二重に増設し、夜間は畑の脇で車のエンジンをつけ、ライトやラジオをつけた。だが、十一月に入り、これら苦肉の策をあざ笑うかのよ様に、被害は続き、被害場所も農場各所に広がった。

「もう我慢できない。猟期は十一月十五日からだ。だが、防衛のためイノシシの捕獲おりに任せておこう。罰を受けることにな

らなくても構わない」。狩猟免許を所持するダッシュ村の清水三雄代表は決心し、「十一日午後二時におりをセツトする」と地元メディアに宣言。

苦心のいかなくメチャメチャ ライトやラジオ 二重の電気柵...

当日、捕獲おりの許可権限を有する京都府や福知山市の担当者らが農場へ急行。生活防衛のためと主張する清水代表と、違反を主張する担当者の間で押し問答に。

その日は行政側が「再検討し返答する」として、清水代表も一日待つことにした。

ところが「事件」はその晩に起きた。二重の電気柵に囲まれたジャガイモ畑にはまだ二割ほど作物が残っていたが、翌朝には根こそぎ荒らされていたのだ。設置許可が下り次第、留め具を外そうと準備していた三つの捕獲おりに、中にまいていたエサの米ぬかが見事に平らげられていた。

「おりをセツトしておけば、最後の被害を防げたかもしれない。一口農場主の皆さんに申し訳ない。他の作物で許してもうらうしかな。それにしても今年のイノシシは手

段を得たことになり、清水代表は悔しさをかみしめた。

メチャメチャ

当方が住んでいる辺りは、町内の古老によると「ついこの間まで（数十年前まで）番地もない未開地だった」という。現在も山手へどんどん開発が進んでおり、人と車があふれる住宅密集地になってしまった。いつの時代か、人と動物の立場が入れ替われば、われわれが狩猟や駆除の対象になるかもね。（立）

そして十五日から猟期（来年二月十五日まで）に入ると、皮肉なことに被害は減った。京都府からは「獣害の兆しが出てきた場合、猟期外であっても申請すれば、狩猟免許を持った人には捕獲おりの使用を即日許可する」との正式回答があった。

ダッシュ村の場合、清水代表ら数人が狩猟免許を持っており、今後は捕獲おりにワイヤを使ったくくりわなを用い、機動的に自分で農場を守る手段を得たことになる。

